

## しのびごと

故齋藤清衛先生尊靈の御前に

三月五日の広島は、久しぶりの好天に恵まれ、漸くにして本来の春に立ち返ったかと思われるような気温でございました。正午過ぎ、勤務校の明るい窓辺の電話が、突如、先生のご急逝を報じて来ました。思いがけぬ悲報に、一瞬わが耳を疑うほどでございました。

昨年五月十一日、多摩河畔登戸の紀伊国屋に、先生をお慕いする知人・門弟相寄り、先生の米寿を祝う席を設けましたところ、先生には奥様とお揃いでお出ましただき、私どもの捧げる祝意を、殊の外喜んでお受け下さいました。会は、稀に見る雰囲気盛り上がり、あの時の先生ご夫妻の温顔は、今も鮮やかに眼前に蘇ってまいります。今年五月のご誕生日にも、昨年のような元気な先生にお目にかかるのを楽しみにしています、とつい先達でもお便りを差し上げたところでございます。

しのびごと

私が先生の訾咳に初めて接したのは、大正十四年春、広島高等師範学校文科第一部に入学した

時でございました。あの時から、茫々六十年に垂んとする歲月が流れましたが、その間、先生から頂いたものは、計量するすべもないほどでございます。

先生は、八十八年のご生涯において、何度かの自己変革のための生活転換を決意し、かつ実行されました。わけても、昭和八年、先生四十歳の春、西行・兼好・宗祇・芭蕉ら放浪詩人の跡を慕い、教壇を去って、全国行脚の旅へ出られたことは、先生のご一生で、もっとも大きな出来事であったのではないかと思います。その年の五月十九日、先生は、『地上を行くもの』の行脚につぐ、『はてしなく歩む』の旅の第一歩を、東京府下千歳村の拙宅から起されました。東海道を歩みつづけて、東京にお着きになり、僅か三日間のご滞在のあと、「陰惨に濁ったままの東京の大空」よりも、「青空と白い雲、新緑の野と涼々として流れる水」の方に、先生の心は走っていたのかも知れません。その朝私は、先生を送って家を出ました。雨気を含む大気が低迷しているとはいえ、すでに若葉に装われた榎林や樺並木は、さすがに武蔵野の初夏を思わせるものがありました。

私は、甲州街道に通ずる一筋道が、村外れの土橋のあたりにさしかかった所で、先生にお別れして、そのまま先生のお姿を見送って立っていました。やがて道が左に折れて、先生のお姿は、ふと樺並木の蔭に隠れましたが、その時も、それまでも、先生はついぞ私の方を見返ろうとされませんでした。先生のお姿が見えなくなってからも、私は暫くそこに立って、先生と自分との距

離ということを考えていました。先生の後ろ姿と自分との間のこの距離を、そのまま保ちつづけようと、その時私は思いました。一抹の孤高の影をまといながら、ひたすら前方を見つめて歩んで行かれる先生のお姿を、決して見失うまいと思いました。

先生は、他人に対しては、大層寛大でいらつしやるに引き替え、自己を責めること極めて厳格な方でいらつしやいました。これは、先生ご自身、自分は他人の生涯に立ち入り、他人の運命にかかわることを、ひどく怖れる性分である、と述懐してられることも関連します。考えてみますと、一組の男女の結婚を、進んでとり持つことすら、怖ろしいことに違いない、一人の男、一人の女の運命に、みずから重大なかかわりを持つこともなるからであります。このような性向が、厳しい自己凝視から出発して、肉身の個性、特に性格遺伝の探究、さらに民族性の究明へと進まれた先生の学問の性格と方向とを規定したことも、自然の数であったといえましょう。人生・学問一如の道を、ひたすら歩まれる、求道者としての先生のお姿が、そこにありました。私が、ひたすら見失うまいと努めて来たのは、そういう先生の後ろ姿でした。それは、同じ地上の前方を、まっしぐらに生きて行かれる後ろ姿でしたが、先生のご永眠によって、幽明境を異にする幾億万里の隔たりが、後ろ姿との間に出来て了いました。厳しい現実の中で、辛うじて、自分を支えてきたのが、同じ地上に先生が存在されるという意識でした。これから先、頽齡のこの身は、どのようにして余生の險路を辿ったらよいのでしょうか。

今こうして、先生のご尊影を前にしておりますと、先生の海山のご鴻恩に、全身全霊をもつて  
拝謝する思いとともに、ひしひしと押し寄せる孤寂の思いを、どうすることも出来ません。

### 追記

恩師齋藤清衛博士は、昭和五十六年三月四日夕、川崎市多摩区高石一二七のご自宅で逝去された。本年  
五月二十六日に第八十八回の誕生日を迎えられるところであった。右の一文は、七日ご自宅で行われた葬  
儀の席で、門弟代表として読んだ弔辭である。

(五六・七)